

## アメリカに於けるトーマス・マン (2)

—カリフォルニア, 「養う人ヨーゼフ」—

小 林 佳世子

Es gibt keinen Weg zur inneren Vision als den über die äußere. Das neue Land, in dem wir leben, beeinflusst die Wahl unserer Stoffe, beeinflusst die Form. Die äußere Landschaft des Dichters verändert seine innere.

Lion Feuchtwanger: Arbeitsprobleme des Schriftstellers im Exil (1943)

### I

1938年9月25日にニューヨーク到着後, 9月28日から約2年半, ニューヨーク郊外の町プリンストンに居住し, 新しい世界でドイツ亡命作家の代表者として多岐にわたる活動を続けた<sup>1)</sup> トーマス・マンは, 1941年3月にプリンストンを離れ, カリフォルニアに移転することになった。3月中旬から「戦争と未来」<sup>2)</sup>を演題にしてトーマス・マンは合衆国西部を講演してまわり, 4月8日以降, カリフォルニア州ロス・アンゼルス郊外のパンフィック・パリセイズで当座の家を借りて生活を始めた。その後, この町に自らの家を建てて1942年2月上旬よりそこに落ち着き, 以後1952年6月末にアメリカを去ってヨーロッパへ帰還するまでの10年余り, トーマス・マンのカリフォルニア生活は続いたのである。

このカリフォルニア時代のうち, 本稿では, まず1943年3月までを取り扱い, この時期のトーマス・マンの亡命作家としての活動と作品を検討したい。世界情勢はあいかわらず厳しく, アメリカも参戦するようになったこの時期におい

て特に注目すべきは、トーマス・マンが「養う人ヨーゼフ」を完成し、16年がかりで四部作「ヨーゼフとその兄弟たち」<sup>3)</sup> を完結したことである。「最初から最後まで一語残らずアメリカで書かれた」<sup>4)</sup> という点を軸にして、本稿では主として、この「養う人ヨーゼフ」の成立の背景やその内容を検討したいと思う。

## II

まずトーマス・マンのアメリカ東海岸から西海岸カリフォルニアへの移転の動機を見てみよう。トーマス・マンのカリフォルニアとの接触は、すでに第4回目のアメリカ旅行中に行われている。彼は1938年4月に数週間カリフォルニアのビヴェリー・ヒルズ・ホテルに滞在している。この時にはすでに彼のアメリカ移住への決意は固まっていたが、「将来性がある、物価が安く、素晴らしい気候に恵まれたカリフォルニア」か「ヨーロッパに近い東部」<sup>5)</sup> かどちらかに居住することを考えていた。実際にプリンストンを訪れてみて、非常に美しい町ではあるが、「学者的な雰囲気になんか恐れをなした」とか、むしろ「ハリウッドの映画連中の方がまだ好ましく」思え、「ビヴェリー・ヒルズかサンタ・モニカの方がプリンストンより陽気だし、気候が良い」と述べている。<sup>6)</sup> 最終的にはプリンストン大学からの招聘でプリンストンに落ち着くことになったのであるがカリフォルニアに居住することへの憧れの気持は抱き続けていたようである。

翌1939年春に10日間カリフォルニアに滞在した時に、トーマス・マンは、ここに小さな家を建てたらどうだろうと友人のアグニス・E・マイアー夫人宛の手紙<sup>7)</sup> でもらしている。翌1940年には、定住のための試みとして7月から10月までカリフォルニアのブレントウッドで家を借りて過ごしている。この間にこの家は「危険にさらされた人々、救助を求めて叫んでいる人々、破滅しつつある人々のための援護事務所」<sup>8)</sup>、つまり亡命者救助のためのセンターと化していたということである。この夏のカリフォルニア滞在中にトーマス・マンはパシフィック・パレイセイズに土地を購入している。サン・レモ・ドライブに面したレモン畑と7本の椰子のある土地で、そこに建築する家を ≫ Seven Palms House ≪

と名づけることに決めている<sup>9)</sup>。

アメリカ東部の気候の悪さに比してカリフォルニアの温暖な気候、自然の美しさ、そして安い物価ということもトーマス・マンの移転の要因ではあるが、さらにプリンストン大学講師としての任務をすでに1940年5月に終えていたこと、そしてドイツ語を話す親しい亡命者仲間がカリフォルニアにいたことがあげられよう。実際、トーマス・マンが移転した時には兄のハインリヒ・マンをはじめ、ブルーノ・フランク、レーオンハルト・フランク、リーオン・フォイヒトヴァンガー、アルフレート・デブリー、フランツ・ヴェルフェル、ブルーノ・ヴァルター、アルノルト・シェーンベルク、ハンス・アイスラー、テオドーア・W・アドルノ、エーリヒ・v・カーラー等々多くの亡命者達が住んでおり、カリフォルニアはドイツ亡命者の一大中心地となっていた。しかし、トーマス・マンに、自分の家を建てて定住しようという決意を固めさせたものは、何よりも当時の政治情勢であったと言えよう。戦局を見て「今の事態はまだまだ長びくだろう」と予測したトーマス・マンが、戦争終結後もヨーロッパはすっかり変貌してしまっていてヨーロッパへの帰還など考えられないことではないかという懸念を抱いた<sup>10)</sup>こと、さらには市民権を得てアメリカ人として居住しようとしてまで決意したこともある。新築の家は1942年2月上旬に完成し、アマルフィ・ドライブ740番の借家からサン・レモ・ドライブ1550番の新居<sup>11)</sup>に移転したトーマス・マンは忍耐強く、規則正しい執筆生活を続けた<sup>12)</sup>。この家で、しかもドイツから持ちまわっていた昔なじみの書斎机で、以後多くの作品が生まれることになったのである。

この家でまず最初に完成された大作は「ヨーゼフとその兄弟たち」の最終巻「養う人ヨーゼフ」であるが、この小説の執筆中も、トーマス・マンは決してそれに専念できたわけではないことは言うまでもない。プリンストン時代と比べると大学での講義、雑誌「尺度と価値」(Maß und Wert)の発行という仕事はなくなったものの、小説執筆以外に、相変らず講演旅行、会合に出席しての挨拶、エッセイ執筆、ラジオ放送、そして亡命者救済のための活動等、厳しい世界情勢下にドイツ亡命者の代表として多忙な日々を過ごしたのである。この時期の長期の講演旅行は1941年10月下旬から11月下旬にかけて合衆国南部、

東部、中西部にわたって行われたもので、演題は「戦争と未来」ということになっている。この題目ではすでにこの年の1月中旬および3月中旬から4月中旬にかけて、講演してまわっているし、後になって1943年にも何度か講演しているが、これらはすでに1939年3月から4月にかけて行った講演「自由の問題」<sup>13)</sup>、1940年10月の「戦争とデモクラシー」<sup>14)</sup>や、後に1942年1月16日から20日にかけて行った「いかにして平和を獲得するか」<sup>15)</sup>などとほぼ同じ内容で、戦局に応じて少しずつ手を加えていったものである。つまり「自由の問題」が基礎になっていて<sup>16)</sup>、社会的デモクラシーの必要性を説いたものである。その他の講演としてはカリフォルニア大学名誉博士号を授与された時<sup>17)</sup>の「思考と生活」<sup>18)</sup>があり、思想家の責任やニーチェについても語っている。ところでトーマス・マンは1942年1月1日から合衆国国会図書館のドイツ文学部門顧問に就任し、公務員として4800ドルの年俸を得ているが、その任務の一つとして1942年11月17日に国会図書館で「ヨーゼフ小説の主題」<sup>19)</sup>という講演を行っている。これは執筆中の「養う人ヨーゼフ」を中断して準備したものであるが、「ヨーゼフとその兄弟たち」の完結を目前に控えた時期に準備されたものであるので「ヨーゼフ物語」を全体的に眺めることのできる優れた案内人による物語の解明となっている。

会合での挨拶としては、1941年5月2日に兄ハインリヒ・マンの70歳の誕生日を祝賀したもの<sup>20)</sup>があり、兄がアメリカで孤独に悩んでいるが、今日ドイツが異国になってしまったのであるから異国こそ我々の故郷になったと認識すべきだということやドイツにおよぼしたニーチェの影響について述べたあと、現在の事態をごく初期に予知し、デモクラシーということを口にし、その必要性を訴えていた兄の優れた先見性を讃えている。その他、フェデラル・ユニオン午餐会でのテーブル・スピーチ(1941.5)、サン・フランシスコのアメリカ緊急救助委員会での挨拶(1941.6)、アメリカ参戦を歓迎したスピーチ<sup>21)</sup>、1941年12月15日の「芸術家と自由の権利」<sup>22)</sup>、ノーベル記念正餐会でのスピーチ<sup>23)</sup>(1942.12.10)等々がある。またエッセイ風のものとしては長男クラウス・マンが出していた雑誌「決定」(Decision)のための論説「ドイツの罪と使命」(1941.7)やアメリカの刊行物——マルティーン・ニーメラー「神はわが導き」、

フランツ・カフカ「城」、マルティーン・グンペルト「帰化手続第一書類」などのための序文やトーマス・マン自身の政治論集「時代の要求」の序文、さらに妻カーチャ・マンの祖母の思い出を綴った「リトル・グランマ」<sup>24)</sup> (1942. 8), 「ドイツのインフレーションの思い出」<sup>25)</sup> (1942. 8) 等々を書いている。

また、プリンストン時代、1940年5月から行なっているBBCを通じての月例のドイツ向けラジオ放送「ドイツの聴取者の皆さん！」<sup>26)</sup>もカリフォルニアでも続行している。カリフォルニア移転後は、それまでと違ってトーマス・マン自身の声がドイツに届くようになったのである。1カ月のうち、「自由と神話劇」ヨーゼフ物語のために4週間を使い、残りの1, 2日を「魂の奥底から戦闘の指揮者」<sup>27)</sup>となり、ファシズムに対する憎悪をドイツ、ヨーロッパに向かって語りかけ、また世界情勢を報じてドイツ人に覚醒を呼びかけたのである。例えば1940年11月にはルーズヴェルトが大統領に三選されたことを伝えたり<sup>28)</sup>、1942年2月にはナチスの野獣主義を暴露し、「ドイツ民族は、『ナチスを絶滅しなければならない！』という叫びが次第に『ドイツ人を絶滅しなければならない！』という叫びに変らないように、他の諸民族と共存できる民族になりたいと憧れてはいないでしょうか？」<sup>29)</sup>と呼びかけている。そして1942年9月27日にはドイツ人達にナチスのユダヤ人虐殺の実情を具体的に、しかも詳細に報告している<sup>30)</sup>。また、1943年1月24日には、ナチス支配の存続10年目にあたって、ナチスは自分たちの没落のことを熱心に考え始めているが、「ナチスにとってはドイツのことなど少しも問題ではなく、自分の身が可愛いだけ」なので、ナチスとともに最後の土壇場にまで追いこまれないように、彼らが醜行をさらに重ねて「寛大な、和解の精神に基づく講和が決定的に不可能にならないうちに、皆さんは、この気違いじみた連中の腕を取りおさえてやめさせるつもりはないのでしょうか？」と警告している<sup>31)</sup>。その他アメリカ国内の放送で自作「すげかえられた首」についての対談(1941. 6)を行ったり「私はアメリカ人である」(1941. 7)という放送もしている。

そして亡命者の中でも例外的とも言えるほど極めて恵まれた立場にあったトーマス・マンは、この時期にもやはり良心的義務感から亡命者の代表として「緊急救助委員会」<sup>32)</sup>等の活動を行なっている。兄ハインリヒをはじめとする

多くの亡命ドイツ作家たちはハリウッドの映画会社と脚本家として契約したおかげでアメリカへの入国および当面の生活を保障されていたが、1年で一方的に契約切れを通告され、経済的困難に陥ることになり、その件でもトーマス・マンは尽力をした。ところで1941年末、日本軍の真珠湾攻撃に対して12月8日にアメリカは対日宣戦布告をし、ひき続きドイツとイタリアに宣戦した。このアメリカの参戦によって、まだアメリカ国籍をとっていない亡命ドイツ人の公的な立場はイタリア人、日本人とともに「敵性外国人」(enemy aliens)ということになり様々な制限が課せられた<sup>33)</sup>。例えば、合衆国内の旅行でも許可が必要となったし、短波受信機を持つことも禁止され、カリフォルニアでは夜間外出禁止令(夕方6時から朝8時まで)も出された。トーマス・マン自身はチェコスロヴァキア国籍を持っていたため、この措置に直接に該当するわけではなかったが、亡命者のためにルーズヴェルト政権の要人であるウォーレスや法務長官ドヴィルに、このような制限を早くとり除くように働きかけたり、制限を緩和するようにというルーズヴェルト宛の請願の電報を、アインシュタインに宛てた手紙(1942.2.9)<sup>34)</sup>に同封し署名を要請している。ジュゼッペ・アントニオ・ボルゲーゼ、アルベルト・アインシュタイン、ブルーノ・フランク、スフォルツァ伯爵、アルトゥーロ・トスカニーニ、ブルーノ・ヴァルターと連名でトーマス・マンの打った電報には、「敵性外国人」と呼ばれている人たちの多くはナチズム、ファシズムの犠牲者で、アメリカが相手として戦っているドイツ、イタリアの政府を優れた先見の明をもって極めて早くから敵として戦ってきた人々であり、デモクラシーの忠実な擁護者であり続けたので、この全体主義の敵である人々とアメリカの真の敵である外国人とを判然と区別して欲しい<sup>35)</sup>という訴えが盛り込まれている。

### III

以上概観したような「時代の要求」にもとづく多様な活動を行いながらも、トーマス・マンは作家本来の仕事に励み、この時期には二つの小説を完成している。まず長編小説「ヨーゼフとその兄弟たち」の第4巻(最終巻)「養う人ヨーゼフ」を1943年1月4日に完成した。その直後に次作の準備にとりかか

り、1月28日に執筆を開始し、トーマス・マンとしては珍しく短期間で短篇小説「掟」<sup>36)</sup>をこの年の3月13日に書きあげている。これは本来、国際的に著名な10人の作家が作品を寄稿する計画になっている「十誡」という本に序文を書いて欲しいと前年11月下旬にニューヨークで依頼されたことが契機となっている。十誡発布の物語を序文ではなく一つの短篇小説にしようとしたトーマス・マンはそれに「掟」という表題をつけており、「モーゼの十誡というよりむしろ道徳律一般、人類の文明そのものを表わそうとした」<sup>37)</sup>と述べている。この小説もまさに「ヨーゼフ物語」と同じ精神圏内にあり「ヨーゼフ叙事詩の余韻」というべきものである。ここでは「掟」については検討せず、「養う人ヨーゼフ」だけを考察の対象としたい。

まず「ヨーゼフとその兄弟たち」の成立史をふりかえってみよう。「ヨーゼフとその兄弟たち」の完成には実に16年もの歳月がかけられているのである。勿論、その歳月は平穏な日々ではなく、文字通り波瀾万丈の激動の時代であって、ドイツおよび世界の政治情勢の変化とともにトーマス・マン個人の生活も変転を余儀なくされた時期である。1926年に第1巻「ヤーコプ物語」執筆開始とともに「かつて」と「いつか」という二重の意味をもつ *einst* という言葉の精神をもって、つまり、かつてあり得たことは、またいつかあり得るだろうという確信をもって数千年も昔の「旧約聖書」の世界へ下りたっていった時、この作品がこれほど浩瀚なものになり、これほどの歳月を経て、しかもアメリカで完成されることになろうとは、トーマス・マンも予想だにできなかったことであろう。

1925年頃に妻の友人である画家からヨーゼフの絵を画いた画帖の序文を依頼されたのが契機となり、「旧約聖書」を繙いてヨーゼフの物語を読みかえしたトーマス・マンはこの物語に魅せられてしまい、この物語に、精神的ならびに技術的に近代的な手段で新しく手を加え、物語として新鮮な作品に完成したいという創造的な誘惑の気持が直ちに彼の内部に芽生えたということである。それとともにゲーテの「詩と真実」の中の文章、つまり、「この素朴な物語は極めて愛すべきものではあるが、あまりにも短かすぎるように思える。それで事細かに手を加えて仕上げてみようという誘惑を感じる」という言葉が自ずとトーマス・マンの脳裡に浮かび、今や、このゲーテの言葉に導かれ、ゲーテの果し得な

かった夢を実現することになったのである。まさにゲーテのこの言葉が「ヨゼフとその兄弟たち」制作のモットーとなったのであった<sup>38)</sup>。ただ骨格だけのような聖書のこの短い物語に肉をつけるために、つまり作り話を加工して「非常に遠くにあり漠然としたものを眼で見、手でつかんでいるような気持」にさせるためには、「言語、心理学、叙述そして註釈的研究調査」といったあらゆる手段により現実化させるという——つまり虚構を作りあげる遊戯 (Spiel) を行う必要があった<sup>39)</sup>。トーマス・マンは丁度、種々の体験を積み重ねて物語に「人間的、精神的内容を盛りこむことのできる老年」にさしかかっていたのである。つまり、丁度「あらゆる単なる個人的な特殊なもの、個々のケース」、広義の「市民的なもの」への興味がうすれて、「典型的なもの、常に人間的なもの、常に回帰するもの、超時間的なもの、要するに神話的なもの」が関心の前面に出てきた時期であった<sup>40)</sup>。しかもトーマス・マン個人のみならず、その時代そのものが「人間の問題、ヒューマニズムの問題が我々の眼前に提起される」<sup>41)</sup> という時代になっていたのだ。

初めは「歴史的な三幅対の祭壇画というべきものの一幅としての短篇小説」<sup>42)</sup> をという計画で「ヨゼフ物語」にとりかかったのであるが、トーマス・マンのいつもの流儀で、例の如く「作品そのものの意志」に従って成長し、あの短かな「愛すべき物語」は約26.5倍<sup>43)</sup>に膨張し、「悠々と流れてゆく7万行」の「ユーモラスな人類の歌」<sup>44)</sup> である「ヨゼフとその兄弟たち」へと生まれかわったのである。第1巻「ヤーコブ物語」は1926年12月から1930年10月下旬にかけて執筆され、1931年1月から執筆された第2巻「若きヨゼフ」は1932年6月に完成され、その直後1932年7月初めから第3巻「エジプトのヨゼフ」執筆が開始され、1936年8月23日には完成している。第1巻、第2巻はそれぞれベルリンのS・フィッシャー書店から1933年10月、1934年4月に刊行されたが、第3巻はヴィーンのベルマン・フィッシャー書店から1936年10月に刊行されている。そしてその後の長期の中断のあと第4巻「養う人ヨゼフ」は1940年8月10日前後にやっと手がけられ、完成したのは1943年1月4日<sup>45)</sup>で、発表は1943年12月にストックホルムのベルマン・フィッシャー書店からである。この経過をふりかえって見ると、第4巻「養う人ヨゼフ」は制作年代、制作



場所の違いから4部作の中でも特別な位置を占めていることがわかる。第1、2巻は、トーマス・マンがまだ亡命する前にドイツで書かれ、彼が国外に出たからではあるが、ドイツで出版され、ドイツの読者の手に届いている。第3巻は主にトーマス・マンがスイスに移り住んでから書かれ、トーマス・マンはすでにその年(1936年)、自己が亡命者たることを表明し、ナチス政権と袂を分かっていたので、ドイツではなくウィーンのベルマン・フィッシャー書店から出版されることになったのである。それ以後トーマス・マンはドイツ国籍剥奪、ボン大学名誉博士号剥奪などを経験し、1938年からアメリカに移住してドイツ亡命者の代表としての多面的な活動をしている。その間に長篇小説「ヴァイマルのロッセ」<sup>46)</sup>、短篇小説「すげかえられた首」<sup>47)</sup>の完成をはさみつつ、「ヨーゼフ物語」の第4巻が執筆、完成されたのである。つまり第3巻は、まさに「ドイツとの訣別」の、そして第4巻は「ヨーロッパとの訣別」の刻印を押された<sup>48)</sup>書物である。1940年8月上旬に避暑地カリフォルニアのブレントウッドで第4巻執筆に着手したトーマス・マンが1941年カリフォルニアのパシフィック・パライゼズに居住しはじめた時には、第4巻中で最も決定的な場面とも言えるヨーゼフとファラオの壮大な対話の場面が丁度書きはじめられている。この作品執筆の進捗状況については主としてアグニス・E・マイヤー夫人に宛てた手紙等から刻々と知ることができるが、トーマス・マンが作品の執筆にいかに関心を傾け、また楽しみにしていたか<sup>49)</sup>、たとえワシントン等で講演旅行中であっても寸暇を惜しんで執筆に勤しんでいたか<sup>50)</sup>ということなども読みとれるのである。最終巻「養う人ヨーゼフ」は、第2次世界大戦という暗雲が垂れこめていた時代にありながら、「すべてアメリカの空の下で、しかも大部分は、エジプトを想いおこさせる明るいカリフォルニアの空の下で出来上がった」<sup>51)</sup>晴れやかな作品である。長い中断ののち第4巻の成立を促し、推し進めたものは一体何であったのか、そして一語残らずアメリカで書かれたため「この国の精神から、あれやこれやのものが与えられていることは間違いないことであろう」<sup>52)</sup>とされている第4巻がアメリカから一体どのような影響を受けているのかということに焦点を絞って考察を進めたい。

周知の如く、この「ヨーゼフとその兄弟たち」の素材は「旧約聖書」の「創

世記」第27章から第50章迄のほんの短い部分であるが、第4巻は第39章20節の途中から第50章までの部分にあたっている。トーマス・マンの小説では、ヨーゼフがファラオの廷臣ポティファルの妻に「言い寄った」との廉で「第2の穴」であるツァヴィ＝レーの牢獄に入れられるが、そこで獄長マイ＝ザクメの信を得て、半年後には獄内の囚人の監督の長という役割を与えられ、やがてファラオの廷臣2人の夢をうまく解き明かしたことから、獄中生活3年後、今度はファラオの夢を解くために召喚される。若いファラオ（アメンホテプ4世）は夢を解明してくれたヨーゼフを自己の良き理解者、実際的な職務の代行者として経済大臣に任命し自己と等しい位に高めた。ヨーゼフはやがて来るべき凶作に備えて対策を講じ、危機をうまく乗り越え、エジプトおよび近隣の国々の「養い親」となるにいたる。その間にエジプトへ穀物を求めてやってきた兄弟たちに、自分がヨーゼフであることを知らせるためにヨーゼフは芸術家的な能力を発揮して「神の物語を美しく飾る」(GW. V. 1591) 準備を整え、まさに Spiel を完成し、劇的に「自分がヨーゼフだ」ということを神話的形式の典型である „Ich bin's.“<sup>53)</sup> という形で身元を明かす。そして父ヤコブを呼びよせ、一族をエジプトに居住させる。このように物語の大筋は原典である聖書の筋書きとほぼ同じであり、最後にヨーゼフが兄たちに向かって復讐など考えていないという和解の言葉で終わっている。

この第4巻を長い休止のあとで執筆する決意をトーマス・マンに抱かせ、それを成就させたものとしては諸々の要素が考えられる。まず、プリンストン大学での講義担当を終え、執筆のための余裕ができたことであろうが、大学での活動を辞める因になっているのは「ヨーゼフ第4巻はどうしても70歳の誕生日迄に完成させたく思っていますので、そのためには完全に自由でいなければならないのです」<sup>54)</sup> という信念である。すでに1930年に自分は1945年に70歳で死ぬのではないかとかなり確信的な予言<sup>55)</sup> をしているトーマス・マンが65歳の誕生日を目前にして、円環を美しく閉じるためにこのような決意をしたことも首肯し得よう。また、時代状況が厳しくなるにつれ、「神話をファシズムの手からとりもどしたい」という気持も更に強まったこと、政治的活動を芸術家の良心的な義務として果した後は慰めの場としての創作に没頭したいという気持

が強かったであろうことなどもあげてよいであろう。「故郷喪失とは何であろうか。私がたずさえている仕事の中にこそ私の故郷はあるのだ」<sup>56)</sup>とトーマス・マンはすでに1938年に述べている。

さらに純技術的には、タマルの物語の導入ということも挙げられる。トーマス・マンは、第3巻こそ4部作の詩的頂点だと思えたので、第3巻に比して第4巻は弱くなるのではないかと懸念していたところ、第2巻のラケル、第3巻のムト＝エム＝エネト（ポティファルの妻）に匹敵するような魅力的な女性像としてタマルを第4巻にとりあげることを思いついた<sup>57)</sup>。ユダの嫁で誘惑者タマルの物語は「創世記」においては第38章にあるので、本来は第2巻「若きヨゼフ」の終りか、または第3巻「エジプトのヨゼフ」の前に位置するはずのものであるが、これらの巻では、ヨゼフの成長ということに重点をおいていたので語られないままになっていた。このタマルの話をも第4巻でとりあげることにより——このタマルの物語こそ本来の神の祝福の物語であって、ヨゼフの物語は聖書の中の一挿話にすぎないので——ヨゼフの成熟、出世を語るとともにこの聖書物語を、つまりヤコブ一族の祝福の物語を完結させようというトーマス・マンの気持を強めたのではないだろうか。実際、タマルの章は第4巻では独特な位置を占めており、一つの独立した短篇小説とも言える魅力的な物語になっている。その他、第3巻「エジプトのヨゼフ」完成後、ヨゼフ物語を中断して取り組んだ長篇小説「ヴァイマルのロッテ」を書きあげたことも第4巻執筆の推進力となっていると言えよう。トーマス・マンの創作においては特に作品相互間の有機的関連が強いことが特色であるが、このゲーテ小説「ヴァイマルのロッテ」は「ヨゼフとその兄弟たち」1、2、3巻により準備されたもの<sup>58)</sup>であり、「ヨゼフ」からの引用も多いし、ここではゲーテはヨゼフ同様、二重の祝福を授けられたものと解釈されている。また、この小説中のゲーテの抱くファウスト観などを見れば、逆にこのゲーテ小説が第4巻「養う人ヨゼフ」を準備したもの<sup>59)</sup>であるということもできよう。「ファウストは行為の生活 (Tatleben) へ、政治生活 (Staatsleben) へ、人類に奉仕する生活 (menschheitsdienliches Leben) へ導き入れられなければならない。彼は努力することによって救われるのだが、その努力は、大規模な政治という

形 (großpolitische Form) をとらなければならない」<sup>60)</sup> というようなことをトーマス・マンはゲーテに言わせているが、このファウスト解釈こそ「養う人」としてのヨーゼフを先取りし<sup>61)</sup>、ヨーゼフの進むべき方向を指し示したものである。また、ヴァイマル公カール・アウグストとその大臣ゲーテの関係はファラオとヨーゼフの関係に取り入れられることになったと見てよいであろう。さらに「ヨーゼフ物語」執筆の数年間、トーマス・マンはゲーテの「ファウスト」、特にその第2部を繰り返し読み続け、「ヨーゼフ物語」を「ファウスト」と同じように「人類の象徴」<sup>62)</sup> にしたいという気持を抱き、その意欲によって執筆を励まされたということもある。

#### IV

トーマス・マンが長い中断の後に第4巻「養う人ヨーゼフ」をとりあげ、完成させるにあたって力となったであろう諸要因を以上の如く挙げてみた。しかし、第4巻「養う人ヨーゼフ」を完成させるにあたって何よりも大きな推進力となったものは、トーマス・マンがアメリカに、しかもルーズヴェルトのアメリカに亡命者として滞在していたという事実だと言ってよいだろう。勿論すでに、1938年9月にアメリカに移住するまでに1934年、1935年、1937年、1938年と4回のアメリカ旅行を行い、ルーズヴェルトのアメリカに触れているということが基礎となっているわけである。特に2回目のアメリカ旅行では、1935年6月29日に、トーマス・マン夫妻はルーズヴェルト夫妻にホワイト・ハウスへ食事に招待された。初めて親しく出会ったルーズヴェルトの様子を当日の日記<sup>63)</sup>に記し、ルーズヴェルトが賢明な相貌をしていること、その会話からはエネルギーが感じられること等を書きとめている。少し経てからのルネ・シッケレ宛ての手紙にも、この時のことを述べている<sup>64)</sup>。そこでは、ルーズヴェルトに感銘を受けたこと、ルーズヴェルトは10年間完全に麻痺状態にあるのにエネルギーと、革命的とまでは言わないまでも実験的な勇敢な面をもっていること、資産階級を攻撃しているので彼には金持ちに敵が多いし、またその独裁的な傾向の故に憲法の番人の間にもルーズヴェルトの敵が多いこと、彼は独裁者であると言っても非常に洗練されたタイプの独裁者で、いわば啓蒙開化された独裁者

であること等を伝えている。丁度ドイツでヒトラーが政権を掌握したのと同じ年、1933年の3月4日にフランクリン・デラノ・ルーズヴェルトは合衆国の大統領に就任し、すぐに緊急銀行救済法を出したあと、いわゆる「百日議会」で「ニューディール政策」と言われる諸政策を矢継早にうちだし経済恐慌の危機を打開する努力をしていた。ヒトラーを仇敵としていたトーマス・マンがこのルーズヴェルト大統領とその施策というものを、ヒトラーの場合と対照しつつ期待を抱きながら注視したのも当然のことといえよう。

トーマス・マンはその後、1938年の第4回目のアメリカ旅行では「来たるべきデモクラシーの勝利について」<sup>65)</sup>を演題にアメリカ15都市を講演してまわったし、アメリカ移住後の1939年、1940年にはこの講演の精神を受け継ぐ「自由の問題」をアメリカ各地で数回にわたって講演している。前者は主としてデモクラシーの形態を、後者はデモクラシーの歴史と成立を対象にしているとは言え、どちらもデモクラシーを対象にしたもので、デモクラシーとは「人格の尊厳に結びつく超時代的・人間的な原理である」と規定し、今日、必要なのは社会的デモクラシー——デモクラシーを母胎と感じ、自由の名において調和的な正義を要求する社会主義——であり、戦闘的ヒューマニズムに基づいた戦うデモクラシーであるということを「デモクラシーの古典的な国」であるアメリカの人々に説いてまわり、ファシズム打倒のためにアメリカの参戦を促したものである。この二つの講演においてはじめて、トーマス・マンは社会的デモクラシーの新しい理念を明確に樹立し、デモクラシーは「精神的な面においてと同様、経済的な面においても」、必ず「自由的デモクラシーから社会的デモクラシーへ」と発展する必要があると言って、経済的な面と精神的な面での改革の重要性を説いている。ところでトーマス・マンがこのような具体性を帯びた社会的デモクラシーの概念に到達するように導いたその師表は誰かと言え、まさにルーズヴェルトであり、そのニューディール政策なのであった。「来たるべきデモクラシーの勝利について」において、トーマス・マンは、「今日のデモクラシーの理性的な偉大な代表者」としてチェコのマサリク、フランスのレオン・ブルムとともにルーズヴェルトの名を挙げ、次のように述べている。ルーズヴェルトにおいては「デモクラシーが社会的傾向を帯びて」おり、また「自

由の真の友であり誠実な奉仕者」であるルーズヴェルトはデモクラシーを社会主義的に規制し調整しながら、ファシズムから、そしてまたボルシェヴィズムからその帆をふくらませている順風を奪っている、つまりこれら両方の機先を制しているのだと述べている。また、国家社会主義であるナチスの戦時経済は「道徳的に最も低俗な社会主義の一つの形」であり、「経済に対する国家権力の軍国主義的独裁」であって、社会主義と言ってもドイツは極度の住宅難に陥っていると述べたあとで、トーマス・マンはニューディール政策のうち、ルーズヴェルトが議会に提案した新住宅建設計画に触れ、個人企業と金融資本が国家と共同で経費を賄うこの提案の方がナチス経済政策よりも、より国家的であり、また、より社会主義的であると思うと述べている。

ところで、トーマス・マンにおいては、小説が生まれる時には副産物としてエッセイ等が書かれるのが常となっているが、それらはトーマス・マンも述べるごとく、大概は、外部から求められて書かれたものであるとは言え、「根本的には当の小説を書き進めるうえにおいて私の力を強める以外のいかなる目的をも持っていない」<sup>66)</sup>のである。この時期に書かれたエッセイ〔「この平和」<sup>67)</sup>(1938), 「この世界大戦」<sup>68)</sup>(1939)等々〕そして長篇小説「ヴァイマルのロツテ」、短篇小説「すげかえられた首」、そして多くの講演などはすべて「養う人ヨーゼフ」を産みだすための母胎となっているが、特にトーマス・マンにおいて社会的デモクラシーの理念をつくりあげた上述の二つの講演こそ、「養う人ヨーゼフ」でのヨーゼフが実行する施策に具体性を与え、この小説執筆を推進する力になったと言えよう。大恐慌を乗り越える努力をしているルーズヴェルトの姿およびその施策が、ちょうど飢饉を切り抜け、いわば禍を転じて福となすことに成功したヨーゼフの旋策に移入されていった。それもトーマス・マンによって意識的に取り入れられたのである。

それではヨーゼフの政策はどのようなものであり、どんな点でルーズヴェルトの政策が移入されているか、具体的に検討してみよう。「エジプト全土に7年間の豊作が訪れ、そのあと、前の豊饒がすっかり忘れられてしまうくらいの不作の7年が続く、飢饉がこの国を食い尽し困憊させてしまうだろう」(V.1438)というようにファラオの夢を解いたヨーゼフが提案した対応策は、倉庫に莫大

な穀物を集積するために、まず、今ある以上に新たに倉庫や穀倉を「天の星の数と等しくなるくらいに」建設し、「豊作を管理して供出を促す役人をいたるところに配置」し、穀物を「海の砂ほど」貯蔵し、「凶作の年でも食糧の備蓄があること」を知らせて人心の安定をはかり、「身分の低い者や貧しい者には分配し」、「有力者や裕福な者」には「高値で売却」して、ファラオに権力を集中させ、ファラオの最高権威を維持することが必要で、その実践にあたるために「賢く、配慮の精神に満ちた」、「養う人」としての「展望の主」<sup>つかさ</sup>をおく必要があるという献策をした(V.1473)のである。ファラオはヨーゼフこそそれにふさわしい人間だと見抜き、——ヨーゼフが「自分こそその人間だ」(Ich bin's.)ということをファラオに暗示しつつ語ったからであるが——ヨーゼフを「エジプトの主」<sup>つかさ</sup>、実際には「食糧と農業の大臣」(V.1499)に任命する。

全権を付与されたヨーゼフが実際にとった施策を見てみよう。いわば経済大臣といえるヨーゼフの経済政策の基盤となっている主要なものは、農政改革、つまり土地制度の改革や納税法(5分の1税)の導入、備蓄経済、灌漑など公共福祉のための事業、そして貧民救済などである。ファラオの夢が現実に、ヨーゼフが解いたとおりになった時、つまり豊作が終り早魃から凶作になった時、大土地所有者や有力者、そして新しい国家にとって「眼の上の瘤」(V.1763)ともいえる封建諸侯や金持たちには食物である穀物を高値で売却し、莫大な代金をファラオの宝庫に流入させた。その結果、彼らの金、銀が尽きると家蓄とひきかえに、そしてそれも無くなるとさらに種粃とひきかえに田畑を没収し、彼らを別の地に移住させることにより大土地所有が解消された。大土地所有が解消されると、より小さな農地には小作人が配置され、小作人たちに国家に対して時代の最高水準の耕作、運河開設、土地灌漑を行う責任を負わせた。語り手は、これを総括して「民衆に対する土地の平等な配分であり、王冠の監督により改革された農業であった」(V.1763)とこの農地改革のことを説明している。つまり多くの地主は、それまで自分たちが管理していた畑から追われて、新たに分割された小区画の土地をあてがわれ、そこへ移り、彼らのそれまでの畑は他の多くの人々の手にわたったのである。この移動のことをここでは「転置」(Translokation)(V.1763)という言葉を使って説明しているが、ヨ

ヨーゼフがねらったのは「所有概念の変革」ということ、しかもこの概念の維持と解消が一つになったものということであり、「教育的な意図」から行われたものである(V.1763)と語り手は説明している。

また5分の1税とは、国家が穀種を供給する際に基本的な条件として出したもので、収穫量の5分の1を王室貯蔵庫へ供出し続ける義務を負わせたものである。さらに土地に関して言えば、エジプトの土地は全てファラオの所有になったけれど、農夫たちにこの土地を自由に売却したり相続したりできるという私有財産的な様相を帯びた処分権を与えていたことがあげられている。ヨーゼフの施策によって、財産の概念は「魔法にかけられ」、「どっちつかずの状態」におかれた。つまり「所有の概念は崩されることも解消されることもなく」、「肯定と否定(JaとNein)、維持と消散との間のたそがれ」にある曖昧模糊としたもの(V.1766)になったのである。そしてヨーゼフの経済体制は「国有化と個人の自由な所有権との驚くべき結合」で抜け目のない(schelmisch)印象を与えるものであった(V.1766)と説明されている。ヨーゼフのたった「貧民救済と王権政策の結合」(V.1759)と言われるこれらの政策は、まさに三つのR(Relief, Recovery, Reform)を目標にしつつ、特に社会改革に重点をおいたルーズヴェルトの一連のいわゆるニューディール政策——とりわけ農業調整法(AAA)による農民救済やテネシー溪谷開発公社(TVA)の設立などの公共事業、種々の社会保障政策など国家統制による社会改革政策を想起させるもの、反映したものと言ってもさしつかえないであろう。

ところで、トーマス・マンは「ヨーゼフ物語」で語り手を登場させ、その語り手に、しばしば原典批判をさせており、それがこの作品の特色であるフォーマ Humorの大きな源泉になっている。第4巻で経済大臣ヨーゼフがエジプトでとった政策を語る際には特に原典批判を行いながら話をすすめている。つまり旧約聖書にはこう書いてあるが、実際はこうなのであったというように近代的な科学的知識(特に経済学など)の光を聖書に照射して、あまりにも簡単すぎる物語に説明をつけたり訂正をしたりして肉づけし、実際に起ったことであるかのように眼前に彷彿とさせる手法をとっている。例えば、「創世記」(第47章16節～17節)に「ヨセフは言った、『あなたがたの家畜を出しなさい



い。銀が尽きたのなら、あなたがたの家畜と引き替えて食物をわたそう』。彼らはヨセフの所へ家畜をひいてきたので、ヨセフは馬と羊の群れと牛の群れ及びろばと引き替えて、食物を彼らにわたした。こうして彼はその年、すべての家畜と引き替えた食物で彼らを養った」<sup>69)</sup> という箇所がある。この箇所について語り手は、ヨセフが7年間で建設したのは家畜小屋や牧場ではなくて穀倉だったのであるし、これらの家畜全てを収容する場所も、またそれだけの家畜の用途もなかったであろうから「担保貸付」(Lombardierung) (V.1762) という経済的な知識なしには、このような話は理解できないと言っている。実際には、家畜は殆んど元の屋敷や農場にそのまま留まっていたが、それは古い意味での所有者のものであることをやめたのである、即ち、それは彼らの所有物であり、かつまたもはやそうではなくなっていたとのことである。「制限的な意味での所有物、抵当としての所有物」(V.1762) にすぎなかったのであると語り手は説明している。そして聖書が記録を厳密なものにする努力をせず、ヨセフの措置のねらいが所有概念に魔法をかけ、これを所有・非所有のどっちつかずの状態、つまり制限された所有の状態へ移すことにあるのだという印象を人々に与えるための努力をしなかった点を語り手は批判している。あるいは、「創世記」(第47章21節)に「そしてヨセフはエジプトの国境のこの端からかの端まで民を奴隷とした」<sup>70)</sup> とあるが、実際は自由のない奴隷になったのではなく、5分の1税という形で労働の5分の1だけ国家のために働く、いわば農奴としての賦役を行なうので、全く自由がないというわけではなく「人道的な新時代の市民の自由」と同じ程度であり、搾取というほどのものではないし奴隷というのは誇張しすぎであるとの説明(V.1764)がある。聖書の報告そのままではヨセフのとった措置があまりにも苛酷であり、有罪の宣告を受けかねないが、実際はそうではなく、国民の福利をはかるものであったのだという調子で語り手に原典批判をさせながら「真実」を伝えさせようとしている。語りを楽しみながらも、また、語り手の語る様子を微笑を湛えて見ているトーマス・マンの顔が我々には浮かんで来ざるを得ないのである。

ヨセフの施策に明らかにルーズヴェルトのニューディール政策が影響していることは確められた。もちろん、ニューディール政策にも欠陥もあろうし、

結局は資本主義体制を維持するための役割を果たしたにすぎないとか、あるいはファシズム的傾向があるとか、またあまりにも共産主義的傾向が強すぎるといったような左、右両陣営からの様々な批判もあり<sup>71)</sup>、絶対に理想的なものだというわけではないが、ヒトラーの政策と比較すると<sup>72)</sup>、当時のトーマス・マンにとっては、ニューディール下のアメリカは社会的デモクラシーの概念が具現化された理想に近い社会のあり方に見えたのではないだろうか<sup>73)</sup>。いわばユートピア的な社会をつくる政策としてヨーゼフの改革事業の中にニューディール政策がとり入れられたのでヨーゼフの改革事業は近代的な社会・経済的方法で遂行されている。例えば、Lombardierung, Translokation, Translozierung, Farmer 等の近代的な言葉が使われていたりするのである。

## V

以上検討したように、ニューディール政策が、ヨーゼフの施策に影響を与えているのであるから、主人公ヨーゼフにもルーズヴェルト個人の姿が多少なりとも反映されているに違いないと考えてもよいであろう。ここでトーマス・マンのルーズヴェルト観を、主として「養う人ヨーゼフ」執筆開始後のルーズヴェルト観をひき続き検討したい。1940年11月5日の大統領選挙でルーズヴェルトが三選された時にBBCの月例放送「ドイツの聴取者の皆さん!」において、トーマス・マンはルーズヴェルトの勝利が世界の未来にとって決定的な出来事であると報じ、ヒトラーたちヨーロッパの破壊者たちはルーズヴェルトを自分たちの最大の敵と見做していること、ルーズヴェルトこそ「戦闘的デモクラシーの代表者」であり、「社会的義務を負う新しい自由の理念の担い手」であり、早くから宥和と真の平和とを明確に峻別してきた政治家であるとし、「善いもの、精神的なもの、真に未来的なもの、平和と自由を欲する近代的な大衆指導者」であると述べている<sup>74)</sup>。1941年1月14日から15日にかけてトーマス・マン夫妻がホワイト・ハウスへ招待された時の報告<sup>75)</sup>には、前回(1935年6月29日)の訪問の時と同様、またしてもルーズヴェルトに強い感銘を受けた、と言うよりはむしろ「共感にもとずいた関心を新たに呼びさまされた」ことが語られ、その厚遇された様子の記述は、丁度ヨーゼフが兄弟たちを正餐に招いた時の場面を

思わせるものがあるし、ルーズヴェルトの人柄を「抜け目のなさ、太陽のような明るさ、甘え、如才のなさ、そして率直な確信」とが混合したものとし、彼の頭上には「一種の祝福」のようなものが宿っており、今や是非とも没落させなければならない例のもの——つまりナチズムの「生れながらの敵」であると規定し、「善を、さらに言うならより善きものを欲する、そして恐らく世界のどんな人間よりも我々の味方になってくれる、近代的なタイプの大衆調教師」として見ている。この表現だけからでもヨーゼフの性格との類似を思わせるものがある。特に、祝福などという箇所はまるでヨーゼフそのものだと言えよう。その後、トーマス・マンがルーズヴェルトを語った文章としては、1944年11月7日のルーズヴェルト四選をめざした選挙のための応援演説<sup>76)</sup> (1944. 10. 28) や1945年4月12日のルーズヴェルトの死を悼む追悼文<sup>77)</sup>、そしてルーズヴェルトの死を報じた1945年4月19日の放送「ドイツの聴取者の皆さん！」<sup>78)</sup> などがある。それらの中で描きあげられたトーマス・マンのルーズヴェルト像を列挙してみると<sup>79)</sup>、ルーズヴェルトは「自由、社会進歩、諸国民の共働、経済的に完成されたデモクラシーの象徴」であり、「驚くべき勇気の持主」、「悪の力との妥協、宥和はない、生死を賭してこのような力と闘わなければならないということを知っていた世界で最も強い男」、つまりナチスという「盲目的な悪魔主義の生れながらのそして意識的な敵対者」、「善い行為をする行為の人」、「実行家」、「たくましく、強靱で抜け目のない人」、「善の偉大な政治家」、「デモクラシーの救い、人類とその自由の救い」、「人類の友」、「蛇のごとく賢く、鳩のごとく素直で繊細で頑強、天才のごとく高い才能をそなえて素朴」で「時代の必然性と世界精神の意志に関する直観的な知識」を備えた人、「人類の指導者」、「政治家にして英雄」、「生れながらの政治の達人」(ここでいう政治とは「可能性の芸術」としてとらえられているが)、「カエサルの神楯」、「保守主義と革命、チャーチルとスターリンの間のかげがえのない仲介者」等と呼ばれている。かつまた生と精神、理念と現実、望ましいものと必然的なもの、良心と行為、道徳と権力の間で創造的に仲介者の役割を占めるかぎり政治は芸術と同じ領域にあるからという理由でルーズヴェルトは「政治家にして芸術家」であり、弱さを克服する勇気をもっているという点で「芸術家にして英雄」であると述べられて

いる。そしてルーズヴェルトの仕事は、「人類の仕事」といわれ、ルーズヴェルトは仲介者の精神を備えたヘルメス的な性格の持主としてとらえられている。

ところで「ヨーゼフ物語」、特に第4巻「養う人ヨーゼフ」でのヨーゼフ像はどのようなものであろうか。ヨーゼフの役割や性格の特徴としてどのような点が挙げられているだろうか。例えば「抜け目のない召使い」の章で述べられているように「養う人」、「食物の主」<sup>つかさ</sup>ヨーゼフのとった措置は「魔術師のような機知をもって全く個性的に様々な目標をひとつに結合したもの」といわれ、ヨーゼフには、「夢の精神、すなわち展望の精神と配慮の精神とを持つ敏く賢い男」(V.1444)というように第三者的に自分のことをそれとなくファラオに向って言わせている。また、「二つの世界の間をとりもつ商人、天上と地上との間の仲介者」(V.1545)、「身軽く機敏な、気持のよい調停者としての仲介者の精神」(V.1575)、を備えた人間であり、父ヤーコブがヨーゼフにむかって祝福を与える際に言う言葉には「おまえは、天上からまた下界の深みから祝福されている、晴れやかさと運命によって、機知と夢とによって祝福されているのだ。しかしそれは世俗的な祝福であって宗教的なものではない」(V.1745)とされている。ヨーゼフは「神と人間との両方に寵を得ることができた」が、それは「優雅な仲介者の精神のおかげで両方の気にいった」(V.1804)からである。聖書で歌われているごとく「上なる天の祝福、下に横たわる淵の祝福、乳房と胎の祝福」(V.1804)に恵まれた者なのである。そしてヘブライ語の *tâm* という言葉、円満を意味し天上と下界の出会い所を表わすヘルメス的な言葉の具現者と考えられている<sup>80)</sup>。しかも神の物語を美しく飾ろうとする芸術家的精神と実践的行動の両方を一身に備えた存在である。ヨーゼフはファラオと国民との間の、精神と社会との、エジプトとイスラエルとの間の仲介者、政治的経済的仲介者として、魂の導き手、商業の神であるヘルメス——トーマス・マンのお気に入りの神ヘルメス——的性格をもつ仲介者として描かれている<sup>81)</sup>。

つまり、ヨーゼフもルーズヴェルトも仲介者 (Mittler, Vermittler) 的性格を持ったヘルメス的な人物として把握されており、人類社会のための指導的奉仕者であり政治家と芸術家とを一身に兼ね備えた存在であり、芸術家精神が社

会的なもの結びついて、彼らは「養う人」になっているととらえられている。つまり、トーマス・マンがヨーゼフ像を作りあげる際に、ルーズヴェルトの持つ要素を取り入れるとともに、逆にルーズヴェルトを語る際に、かなり意識的にヨーゼフの姿とオーヴァーラップさせてトーマス・マン独自のルーズヴェルト像を作りあげているということができよう。そして、ルーズヴェルトがナチスの生れながらの敵であるごとく、ヨーゼフにナチスの敵対者、人類の友としての性格を与え、トーマス・マンはヨーゼフを世に送りだしたとも言えるのである。この四部作の最後の締括りに、ヨーゼフの復讐を恐れる兄たちにむかって、自分は報復は絶対にしないというヨーゼフの言葉に耳を傾けよう。「なぜなら、ただ権力を持っているというだけの理由で、正義や理性に対して権力をふるう者はお笑い草というべきものだからです。今日まだ、そのような者がお笑い草でないとしても、将来はお笑い草になるでしょう。そして私達は、この将来に味方をしているのです。……」<sup>82)</sup> このヨーゼフの和解の言葉こそ、トーマス・マンの信念を表わすものであり、ナチスに向かって投げかけた言葉であるとともに人類全体に向かったの普遍的な知恵の贈り物である。トーマス・マンにおいては、ヨーゼフはルーズヴェルトであり、広く言えば、「善意の国」、「人類の未来を決定する」国、戦後の「世界の穀倉、文字通り諸国民の養い手」となるべきだとトーマス・マンが希望を托しているアメリカ<sup>83)</sup>であるのみならず、「ヴァイマルのロッセ」で考察されたようなゲートであり、またファウストであり、そして何よりも、芸術と社会を自己の中で融合させるべく活動をしているトーマス・マン<sup>84)</sup>、故郷を逐われながら異国アメリカで成功し、亡命者たちの「養い手」ともなったトーマス・マン自身の姿でもあると言えよう。

## VI

以上検討したように、「旧約聖書」を舞台にしたこの「養う人ヨーゼフ」には、トーマス・マンが生きた時代、そして亡命地ルーズヴェルトのアメリカが投影されているが、トーマス・マンの実際の亡命体験のエピソードが利用された

り<sup>85)</sup>、さらに亡命地アメリカの言語も影響を与えているに違いないであろうことも推察され得る。一般に、亡命が作家の作品に及ぼす影響として言語の問題を見逃すことはできない。この問題に関してはリーオン・フォイトヴァンガー<sup>86)</sup>も考察しているように、生きた母国語の流れから切り離されて外国語の中で生活するという事は、作家にとって大きなマイナス面を持つことは勿論のことながら、必ずしも、そればかりではなく、プラスになる面もある。外国語という環境に置かれると、客観的に母国語を眺めることから、母国語の使用に際して、以前より、より注意深くなるということもあろうし、外国で見聞する新しい現象を言い表わすためには新しい言葉が必要であるから言語領域が広がり、それだけ語彙や言いまわし、比喻等が豊富になるという利点もある。また、母国語の流れの中へ外国語を入れることによって独特の雰囲気醸し出す効果もある。亡命が作家の作品に及ぼす言語的な影響、およびトーマス・マンと外国語という問題も重要なテーマであるので別に検討する必要がある、ここでは論じない。また、作品全体が一つの「言語作品」であるこの「ヨーゼフとその兄弟たち」では様々な時代や国の言葉が散りばめられたり、あるいは言葉遊びが行われたりして魅力的な多彩な文章になっているが、それについてもここでとりあげることはしない。亡命地アメリカの言葉がこの第4巻にどのような影響を与えているかということもいずれ検討したい。ただ、アメリカ訪問により、アメリカの言語と接触するに従って次第に、トーマス・マンの言葉に英語そのものや英語的表記方法が増えていることは手紙などからでも明らかである。トーマス・マンはアメリカでも家族や仲間のあいだではずっとドイツ語を使っていたとは言え、講演は英語で行なっており、この時期に書かれた第4巻にも何らかの英語の影響があり得ると推測してもよいだろう。「養う人ヨーゼフ」での英語的用法のほんの一例をあげると、トーマス・マンはファラオに宮殿で母およびヨーゼフの前で妃に向かって „So lange!“ と言わせている<sup>87)</sup>。これは勿論、英語の “So long!” からそのまま借用した言い方でトーマス・マンの遊びであるが、エジプトという外国へやってきたヨーゼフに異国の雰囲気を伝える役割を果たしているとも言えよう。その他 Lunch, Agrikultur, Farmer のような言葉も見られる。なおこの小説の最大の魅力的な特色であるユーモラスで

晴れやかな雰囲気 Heiterkeit を作りあげている様々な語り的手法——Parodie, Ironie, Leitmotiv, 心理学の応用等々——や聖書にはないトーマス・マン独自の発明その他多くの点についても稿を改めて検討したい。

ともかく、この作品はトーマス・マンが亡命地で書いたというだけでなく、主人公ヨーゼフもいわばエジプトに亡命した人間であるという点でも亡命の刻印を受けている<sup>88)</sup>。また「流謫の年月の間中」、トーマス・マンの生活の「統一を保証しながら」、終始トーマス・マンに「付き従ってきた壮大な物語作品」<sup>89)</sup>である。つまり、この作品そのものが、「闘争や憎悪の念を育むよりは、はるかに、わずかばかりの高尚な晴れやかさを世界にもたらすように生れついている」<sup>90)</sup>と自己を語り、世界に楽しみを与えることこそ芸術家の使命だと考えるトーマス・マンにとって、厳しい時代状況の中で政治的な活動を行いつつも、避難できる心安らぐ場所、いわば亡命地であったわけである。

トーマス・マンの小説は殆んど全てが教養小説、発展小説と考えられるが、この「ヨーゼフとその兄弟たち」もその例外とは言えない<sup>91)</sup>。主人公ヨーゼフの成長、発展とともに、この小説も巻を追って成長し、最終巻「養う人ヨーゼフ」は、まさにヨーゼフの発展の最終段階を描き出しており、その意味で、それまでの3つの巻とは違ってきている。つまり、ヨーゼフの世界は死から生へ、個から社会的なものへと転換し、ヨーゼフは人類の教育者とも言うべき「養う人」へ成熟する。この最終段階に到達するには、作者トーマス・マンにとっても激動の16年間という熟成期間が必要であったし、そのなかでも師とも言えるルーズヴェルトから新たな社会的・政治的視点を獲得することができたことも大きな原動力となっていると言ってもよいであろう。第4巻で登場するファラオはアメンホテプ4世（第18王朝・BC 1375—1352）という設定になっているが、歴史上、記録のある時代に舞台の枠組みを設定することによって、「神話」は現実性を帯びた「歴史」へと移行し<sup>92)</sup>、しかもそこにはルーズヴェルトのアメリカの社会的現実の一端も、比喩的にではあるが反映されており、さらに心理学という手段を用いることによって神話は人間的なものへと転換され、ローゼンベルクによって濫用され、冒瀆されていた「神話」が、トーマス・マンの望むごとく「ファシズムの手から奪回される」<sup>93)</sup>ことになったのである。

る。第4巻「養う人ヨゼフ」の完成により、忍耐の結実、「持久と貫徹の記念碑」<sup>94)</sup> と言える作品「ヨゼフとその兄弟たち」は、ゲーテの「ファウスト」のような「人類の詩」<sup>95)</sup> の一つとなったのである。

#### 使用テキスト

Thomas Mann: Gesammelte Werke in dreizehn Bänden. S. Fischer Verlag, Frankfurt a.M. 1974 (以下, GW, I~GW, XIII と略記)

Thomas Mann: Briefe 1889—1936, 1937—1947, 1948—1955 und Nachlese. Hrsg. von Erika Mann. S. Fischer Verlag 1962, 1963, 1965 (以下, Briefe I, II, III と略記)

Thomas Mann: Tagebücher 1918—1921, 1933—1934, 1935—1936. Hrsg. von Peter de Mendelssohn. S. Fischer Verlag 1979, 1977, 1978 (以下 Tagebücher I, II, III と略記)

Hans Bürgin und Hans Otto Mayer: Thomas Mann. Eine Chronik seines Lebens. S. Fischer Verlag 1965

#### 註

- 1) トーマス・マンのアメリカ移住の動機およびプリンストンでの活動についてはすでに検討した。拙稿「アメリカに於けるトーマス・マン(1)——プリンストン時代——」(「駒沢大学外国語部論集」第10号1979.6)
- 2) “The war and the future.”
- 3) „Joseph und seine Brüder“ GW, IV, S.9—903, V, S. 913—1822. Bd. 1 „Die Geschichten Jaakobs“ Bd. 2 „Der junge Joseph“ Bd. 3 „Joseph in Ägypten“ Bd. 4 „Joseph, der Ernährer“
- 4) „Sechzehn Jahre. Zum amerikanischen Ausgabe von >Joseph und seine Brüder< in einem Bande“ GW, XI, S. 679
- 5) An Heinrich Mann 21.4.1938 Thomas Mann/Heinrich Mann: Briefwechsel. Hrsg. von H. Wysling. S. Fischer Verlag 1969 S. 169—170
- 6) An Klaus Mann 12.5.1938 Briefe III, S. 474
- 7) An Agnes E. Meyer 3.4.1939 Briefe II, S. 89
- 8) An A.M. Frey 10.8.1940 Briefe II, S. 154
- 9) An Hermann Hesse 13.7.1941 Hermann Hesse/Thomas Mann: Briefwechsel. Hrsg. von Anni Carlsson. Suhrkamp Verlag Frankfurt a.M. 1977 S. 146
- 10) An Hermann Hesse 2.1.1941 a.a.O., S.140
- 11) 1978年7月26日、筆者が訪れたところ、現在は法律家の Lappen 家の所有となっていた。トーマス・マン在住当時から、お向いに住んでいるという Mrs. Tom Davies の親切なとりなしで、トーマス・マンから買いとって1953年以来住んでい



るといふこの家の夫人 Mrs. Lappen に紹介してもらい、その御厚意で思いもかけず家の中を見せて頂き、いろいろと話を伺った。書齋はほぼ当時のままで居間を少し改造し、庭にプールを作ったとのことであり、椰子の木は4本に減っていた。1975年のトーマス・マン生誕100年記念にゲルマニスト達がこの家に集まったそうである。

- 12) この家でのトーマス・マンの日常生活については „Deutsche Exilliteratur seit 1933 I, Kalifornien“ Hrsg. von J.M. Spalek u. J. Strelka. Francke Verlag Bern und München 1976 中の E.A. Frey の論文中 S. 479—485 に詳述されている。
- 13) „Das Problem der Freiheit“ GW, XI, S. 952—972 (The Problem of Freedom)
- 14) “War and democracy”
- 15) “How to win the peace”
- 16) この「自由の問題」を基礎にした諸講演の関係およびそれぞれの異同については „Dichter über ihre Dichtungen“ の Bd. 14 „Thomas Mann“ Teil II (1918—1943) Hrsg. von Hans Wysling. Heimeran Verlag München 1979 S. 687—691
- 17) 1941. 3. 27.
- 18) „Denken und Leben“ GW. X, S. 362—367
- 19) „Joseph und seine Brüder. Ein Vortrag“ (The theme of the Joseph novels) GW, XI, S. 654—669
- 20) GW, XIII, S. 852—857 なおハインリヒ・マンの誕生日は本当は3月27日であるがトーマスの都合で延期した。
- 21) GW, XIII, S. 714
- 22) GW, XIII, S. 718—722
- 23) GW, XIII, S. 732—738
- 24) GW, XI, S. 467—476. なおトーマスの良き伴侶であったカーチャ・マンはちょうど、1980年4月27日にスイスで96歳の天寿を全うしたところである。
- 25) GW, XIII, S. 181—190
- 26) „Deutsche Hörer!“ GW, XI, S. 983—1123, XIII, S. 738—747
- 27) GW, XI, S. 679
- 28) GW, XI, S. 989
- 29) GW, XI, S. 1030
- 30) GW, XI, S. 1050—1053
- 31) GW, XI, S. 1063—1065
- 32) この委員会に関しては12)であげた本の S. 214—219参照。
- 33) 12)の S. 515および „Die deutsche Exilliteratur 1933—1945“ Hrsg. von Man-

- fred Durzak. Reclam Stuttgart 1973 S. 148 などを参照。
- 34) An Albert Einstein 9.2.1942 Briefe II, S. 236
  - 35) Briefe II, S. 236—237
  - 36) „Das Gesetz“ GW, VIII, S. 808—876
  - 37) GW, XI, S. 154
  - 38) ヨーゼフ物語制作の契機については、GW, XI, S. 136—138および S. 654—655 参照。
  - 39) GW, XI, S. 655
  - 40) GW, XI, S. 656
  - 41) GW, XI, S. 657
  - 42) GW, XI, S. 138
  - 43) Walter A. Berendsohn: Thomas Mann. Künstler und Kämpfer in bewegter Zeit. Verlag Max Schmidt—Römhild Lübeck 1965 S. 99
  - 44) GW, XI, S. 670
  - 45) An Agnes E. Meyer 12.8.1940 Briefe II, S. 155 および 5.1.1934 Briefe II, S. 288
  - 46) „Lotte in Weimar“ GW, II, S. 368—765
  - 47) „Die vertauschten Köpfe. Eine indische Legende“ GW, VIII, S. 712—807
  - 48) GW, XI, S. 661
  - 49) An Agnes E. Meyer 14.5.1942 Briefe II, S. 257
  - 50) GW, XI, S. 150
  - 51) GW, XI, S. 661
  - 52) GW, XI, S. 679
  - 53) GW, IX, S. 496
  - 54) An Agnes E. Meyer 22.3.1940 Briefe II, S. 137
  - 55) GW, XI, S. 144
  - 56) Mitgeteilt von Herbert Lehnert in >Thomas Mann in Exile 1933—1938<, >The Germanic Review<New York 1963
  - 57) GW, XI, S. 678
  - 58) Klaus Hermsdorf: Thomas Manns Schelme. Figuren und Strukturen des Komischen. Rütten und Loening Berlin 1968 S. 227
  - 59) Ebenda.
  - 60) GW, II, S. 677
  - 61) Hermsdorf a.a.O., S. 252
  - 62) GW, XI, S. 665
  - 63) Tagebücher III, S. 131

- 64) An René Schickele 25.7.1935 Briefe I, S. 396—397
- 65) „Vom kommenden Sieg der Demokratie“ (The coming victory of democracy) GW, XI, S. 910—941
- 66) GW, XI, S. 672
- 67) „Dieser Friede“ GW, XII, S. 829—845
- 68) „Dieser Krieg“ GW, XII, S. 863—898
- 69) 「旧約聖書」日本聖書協会 東京 1978, 68頁。
- 70) 同上、同頁。
- 71) 日本でも「大恐慌とニューディール」(ドキュメント現代史5)新川健三郎編 平凡社 1975, 「ナチス経済とニューディール」(ファシズム期の国家と社会3) 東京大学社会科学研究所編、東京大学出版会 1979をはじめ、参考書は多くある。Eike MiddellはJohn Guntherの„Roosevelt“から引用している。„Werk und Wirkung Thomas Manns in unserer Epoche. Ein internationaler Dialog“ Hrsg. von H. Brandt und H. Kaufmann, Aufbau Verlag Berlin und Weimar 1978 S. 236
- 72) An Agnes E. Meyer 5.1.1943 Briefe II, S. 289 では「何であってもヒトラーよりはました」と述べている。
- 73) トーマス・マンは「上からの」教育的なデモクラシーを信奉していた。(GW, XII, S. 933) ルーズヴェルトはその良い例である。またルーズヴェルトのアメリカに対するトーマス・マンの見方については、Eike Middellの「ルーズヴェルトのアメリカに対する Illusion にもとずいた神話的ユートピア」という意見(„Exil in den USA“ Verlag Philipp Reclam jun. Leipzig 1979 S. 217) やトーマス・マンは、ルーズヴェルトを「ほとんど偶像化した」という Klaus H. Pringsheimの見解もある。(„Thomas Mann. Ein Kolloquium“ Hrsg. von Hans H. Schulte u. Gerald Chapple, Bouvier Verlag Bonn 1978 S. 25)
- 74) GW, XI, S. 989
- 75) An Agnes E. Meyer 24.1.1941 Briefe II, S. 176
- 76) GW, XI, S. 979—983
- 77) GW, XII, S. 941—944
- 78) GW, XI, S. 1119—1121
- 79) この三つの文章でのルーズヴェルトに関する表現は重複しているものが多いのでそれぞれページ数を挙げることはしない。
- 80) GW, V, 1616—1617  
Erich Heller: Thomas Mann. Der ironische Deutsche. Suhrkamp Frankfurt a. M. 1970 S. 269 なお Brief an Karl Kerényi 18.2.1941 GW, X, S. 652 では、最終巻でヨーゼフはヘルメス的なものに移行していくことが述べられている。

- 81) Hans Mayer: Thomas Mann, Werk und Entwicklung. Verlag Volk und Wissen Berlin 1950 S. 257—262
- 82) GW, V, S. 1822
- 83) An Agnes E. Meyer 20.8.1942 Briefe II, S. 275
- 84) トーマス・マン自身も生と精神, 芸術と生活, ドイツと世界の Mittler をめざしている。
- 85) 例えば第3巻「エジプトのヨージェフ」のツェルの要塞の場面。Inge Diersen: Thomas Mann. Episches Werk, Weltanschauung, Leben. Aufbau Verlag Berlin u. Weimar 1975 S. 225 で指摘。
- 86) Lion Feuchtwanger: Arbeitsprobleme des Schriftstellers im Exil. In: „Deutsche Literaturkritik“ Hrsg. von Hans Mayer. Fischer Taschenbuch Verlag Frankfurt a.M. 1978 S. 197—203  
F.C. Weiskopf: Unter fremden Himmeln. Dietz Verlag Berlin 1948 S. 37—38
- 87) GW, V, S. 1461 (この指摘は F.C. Weiskopf a.a.O., S. 39)
- 88) Erich Heller は (a.a.O., S. 305 で) 「ヨージェフ物語」をいろいろな意味で das Werk eines Auszüglers であると指摘し, Eike Middell も (a.a.O., S. 229 で) ヨージェフを Immigrant であると言っている。
- 89) GW, XI, S. 153
- 90) GW, XII, S. 787
- 91) Jürgen Scharfschwerdt: Thomas Mann und der deutsche Bildungsroman. Kohlhammer Verlag 1967 や  
Käte Hamburger: Der Humor bei Thomas Mann. Zum Joseph-Roman. Nymphenberger Verlagshandlung 1965. などもこのように見ている。
- 92) Roman Karst: Thomas Mann oder Der deutsche Zwiespalt. Fritz Molden Verlag Wien, München, Zürich 1970 S. 212 でも舞台がエジプトへ移ると神話は歴史小説の様相を帯びて歴史へ移行してくると指摘。
- 93) GW, XI, S. 651 および S. 658
- 94) An Agnes E. Meyer 5.1.1943 Briefe II, S. 288
- 95) GW, XI, S. 658